

輝け 商店街

盛岡市の専門店・3

日専連名誉講師 富山短期大学名誉教授
川中清司

盛岡は、みちのくに輝く伝統のまち

盛岡城跡が街の中央にある。花崗岩の石垣がやわらかいスロープを描き、その美しさは東北三名城の一つに数えられる。緑と四季折々の花が香り、安らぎと歴史の重さを感じさせる。

幕末から維新へと盛岡藩の苦難は続いた。戊申戦争に敗れて朝敵の汚名を受け、八〇里を隔てた白石に転封させられた。巨額の献金で盛岡に復帰を果た

したが、それを支えたのは商人たちだった。戦災をまぬがれ、今も旧城下町のたたずまいを味わう。市民は控えめで人なつつこく、礼儀正しい。岩手山、姫神山がそびえ、北上川、栗石川、中津川の交差する美しい自然。これらが織りなす風土は訪れる人々の心を和ませる。また行きたくなる街。全国大会や商店街の見学もあとを絶たない。



全国朝市サミット2008 in もりおか
(神子田朝市の会場-岩手日報より-)

自然に恵まれた「蔵風得水」の地

盛岡を訪れたのは九月の末。朝六時ごろ市街地を貫く中津川べりに出てみると、あたりを散歩するたくさんの方に出会った。

浅瀬で釣糸を垂れる人もいる。「何が釣れますか」と聞くと、「落ち鮎です」と明るい答えが返ってきた。

城址公園ではラジオ体操の音楽が流れ、数十人が元気に手足を動かしていた。

盛岡は「蔵風得水」の地と言われる。緑の山に囲まれ、風と水が調和し、自然が豊かで住みやすい。蔵風得水は中国古来の「風水」の思想に由来し、山に囲まれて風がさわやか、清らかな川や湧き水に恵まれた土地という意味だ。市の真ん中で初夏には若鮎が踊り、水浴びやボートの川下りが楽しめる。秋には鮭が遡上し、冬には白鳥が羽を休める。

東には北上山地の裾野が緑豊かに丘陵を形づくる。西には豊かな田園が広がり、はるかに奥羽山脈を仰ぐ。盛岡は台地の上に盛られた丘状の町で、花崗岩の地盤の上



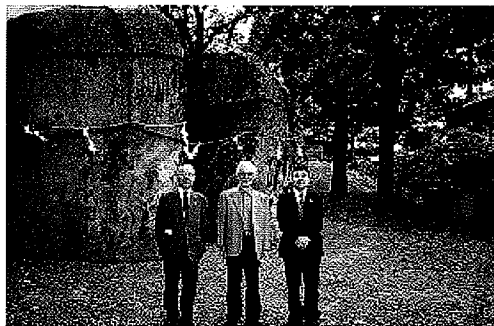
市内を流れる中津川。早朝に釣人が竿を出す

昔は杜もりおかと書いた。今でも「杜の大橋」や市立の杜陵小学校、県立定時制の杜陵高校などがあり、これらは「とうりょう」と読む。

「杜と水の都・盛岡」。市のキャッチフレーズのとおり、大地の生氣が宿る街だ。城址、神社仏閣などが数多く市内に点在し、火山の岩手山が近いため温泉が多い。文化の薫り高く、歩いて楽しむことができる貴重な街である。

来ず方から盛岡へ

盛岡は「不ニヤ来方」と呼ばれていた。その由来は二度と鬼が来ないという意味らしい。高校の名前や



岩手県名の由来があるしめ縄が張られた大石。日専連盛岡会の中村善昭さん(左)、小松敏幸さん(右)〈於・盛岡市内の東頭寺〉

橋の名にも残っている。市内三ツ割の東頭寺にしめ縄が張られた三つの大石がある。岩手山が噴火したとき飛んできた「三岩さま」と崇められていた。

羅刹鬼が現れて悪行の限りを働くので、里人が三岩さまに鬼退治をお願いしたところ、神さまはたちまち鬼を岩に縛りつけた。鬼は「もう二度とこの里には出ません。お許しください」と必死に命乞いをした。その誓いの証しに、岩の上に手形を押して南昌山の彼方へ逃げ去った。これが「岩手」と盛岡の別名「不来方」の起りとい

う。鬼の退散を喜んだ人々は、三ツ

石の回りを「さんさ、さんさ」と叫び踊りながら神さまに感謝を捧げた。これが「さんさ踊り」の始まりともいわれている。

来ず方四季ゆたかな風物詩 「野菜いかがでやんすか」

ほっかむりをしたおばさんが、リヤカーに野菜を積んで売りに来る。農村に囲まれて豊かな自然が楽しめる、盛岡の四季は素晴らしい。

春はタラの芽、シドケ、フキノトウなどの山菜がいっぱい店頭に並ぶ。桜の季節、「石割さくら」で裁判所が観光の名所というのも面白い。この桜、岩の隙間から芽を出して大きく成長し、樹齢は数百年を誇る。

夏はさんさ踊り、八月の三日間、踊り手三万人が浴衣姿でメインストリートを踊り歩く。太鼓一万二〇〇〇個と日本一。一三〇万人の観客が酔いしれる。

秋は松茸、きのこ、りんごがうまい。地酒の味もまた格別。秋祭り山車は三〇〇年の伝統を誇り、豪華な数台の御所車が練り歩く。冬はスキー、岩山パークスキー場や雪石・網張り温泉など、快適なスキー場で楽しめる。

全国大会で集まる人気

こんな土地柄に魅せられて、一度この地を訪れた人はまた行つてみたくなる。二〇年一月一八日に朝市サミットが開かれ、北海道から九州までの朝市一五団体が集まった。市内丸の岩手公園に設けた「石垣おもてなし市」には、県内外の六〇団体が出店し、地域の特産品を販売し、多くの人が押しかけて熱気に包まれた。

愛宕下のグランドホテルでは、全国朝市サミット協議会の総会やシンポジウムに三〇〇人が出席し、「安心・安全な旬の食材を地域に提供」「地産地消の原点、朝市の魅力をアピール」して共同宣言を採択した。



朝市サミットの市。アイスナリリー会場(平成20年10月19日付・盛岡タイムスより)

こうした全国大会が年間二〇回以上も開かれているのも、盛岡の風土と人柄がなすゆえんだ。

歴史と風土に根付く文化

盛岡の歴史は古く、遠く平安時代にさかのぼる。天正一八年(一五九〇)南部信直が豊臣秀吉から南部七郡を本領として安堵された。慶長二年(一五九七)、盛岡城の築城を着手し、南部信直から三代かけて完成。南部藩二〇万石の城下町として発展した。

しかし幕末には大きな波乱に巻き込まれた。慶応四年(一八六八)に戊申戦争が起こり、南部氏は佐幕派として奥羽越列藩同盟に加わり西軍と戦うが、秋田藩が官軍側に寝返って、秋田戦争に敗れて無条件降伏する。

明治二年(一八六九)一三万石に減封されて白石城に移され、盛岡城は秋田藩などの預かりとなった。盛岡を追われて白石までの八〇里は遠かった。路銀はすべて自弁。女、子どもを連れての移動は困難を極めた。家臣四〇〇〇人のうち浪人となった者も多く、白石に着いたのはわずか四〇〇人とい

降伏と終戦の重任を背負った勤王派の目時隆之進は、切腹して果てた。罰金七〇万両を明治政府に納めて盛岡復帰は許されるが、この軍資金の調達を支えたのは近江商人の末裔たちであった。地元ではこのころの藩名を区別して盛岡藩という。

天守閣は明治7年(一八七四)に取り壊される。こうして耐え偲んで培われた盛岡の心が、今も静かに根付いている。

盛岡の氣質 ていねいな訛り

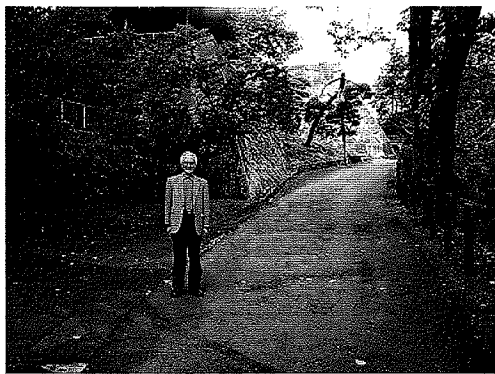
苦難の戊申戦争からまだ百数十年しかたっていない。盛岡武士の名残だろうか。街の人の所作のところがどこかに、慎み深く律儀さが感じとれる。自慢することや厚かましさを嫌う。「あの人あ、しよすがらねえ」と軽蔑する。朴訥(ぼくたく)なうちに奥ゆかしさがある。人との接し方は、どちらかといえば京都風で、年配の女性は近所を歩くにもキチンとした身なりを整えて歩く。

「ふる里のなまりなつかし停車場の人混みのなかにそれを聞きにゆく」―石川啄木が望郷の念にかられて詠ったように、ことは訛りが

人なつつこく、ジーンとした親しみを感じる。敬語の多く語尾に「さ」「つけ」をつける。東北弁の中で一番きれいなのは盛岡のことばといわれる。

盛岡商人の信用も厚い。こんな話がある。昔商いに行つて、「おめはんは南部だえんか、伊達だえんか」と問われた。「南部だ」と答えたら「んだ買うじゃ、南部の人なら」と商談がまとまった。

日専連盛岡の方々との座談会のあと、一行は直利庵で懇親会があった。直利庵は中の橋一丁目にあり、創業が明治一七年(一八八四)の盛岡きつてのそばの老舗で、今は料理にも力を入れ定評がある。



盛岡城址

一関にも同名の店がある。

年配の女将が座敷にあいさつに出た。「ようこそおいでなさいました。ごゆっくりどうぞ」着慣れた和服姿できちんと両手をついた。絆(きずな)に赤いたすき、白足袋の女中さんたちも、和やかなうちに気品があった。帰りには女将が玄関に座りピタリと両手をつけて見送った。

秋田、青森も盛岡藩 今に残る城下町形成

南部藩の領地は広く岩手県的大部分と青森県の東半分、太平洋側、秋田県の一部に及んだ。その影響か八戸との連帯感が強い。岩手日報には青森県の八戸専用ページがあり、県内の天気予報にも八戸がでてくる。

町割を五の字にして、城を囲んで三重構造の堀を巡らし、さらに商家や職人町を配置し、その外側を侍屋敷などで囲んだ。商業や交通の便性に配慮した道路形成を行った。こうした構造が、今なお市街地の骨組みとなっている。県庁所在地では戦災を免れた数少ない街で、奈良市、金沢市とともに、古い史跡や街並みが残されている。盛岡城跡を中心に市街地が南北に広がり、内丸通りは、県



中央に石灯籠がある夕顔瀬橋

庁、市役所など、高層ビルが立ち並ぶ官庁街だ。

雪の季節には車の渋滞がひどい。上の橋から川久保まで、わずか数百メートルに数時間もかかり、館坂までも一時間ということもざらという。厳冬の季節、繁華街が一方通行というのに全く違和感がない。凍った道路にモミ殻、稲ワラを滑り止めに効かず、昔からの知恵も残っている。

近年、南接の都南、矢巾地区に、盛岡流通センターが造成された。最近では東北新幹線の整備により急速な都市化が進んだ。東北での拠点としての位置が高まった。

橋の「つひつひに 歴史の重み

盛岡の旧市内に入るには橋を渡



慶長の年号がある、上の橋の欄干

り商店街も中心繁華街となった。

夕顔瀬橋は、中央に石灯籠が二つあり、そこから岩手山が拝める。明暦二年（一六五六）土橋で架けられ、かつては盛岡の北の玄関口で交通、防衛上の重要な拠点だった。

らねばならない。それらの橋の一つひとつに歴史が薫る。JR盛岡駅の前に開運橋がある。明治二十三年（一八九〇）に石井省一郎・岩手県知事が私費を投じて作らせた。当時、鉄道は都会から煤煙や犯罪を運んでくるといわれ、菜園や着町など、中心部から遠い場所が良

いということ、北上川を越えた所に盛岡駅が作られた。橋の名にも街の運を開くという願いが込められている。

別名「二度泣き橋」という。はるばる陸奥に來た旅人が望郷の侘びしさに泣き、やがて盛岡を離れるとき、その豊かな自然、文化、とりわけ人情の深さに泣くという。現在の橋は昭和二十八年（一九五三）に掛け替えられ、橋長は八二メートル。トラス橋でアーチ構造となり、盛岡駅前と旧市街地を結ぶ新興大通

「よのじ橋」は、市役所のすぐそばにあり、堤防には大きな柳の枝が垂れて風にそよぐ。消防の「よ組」の名にちなんだもので、間近に今も消防隊の番屋が残る。向こう岸には莫産九・森九商店の土蔵造りの家邸が残っていて、藩政時代の面影が感じられる。

「中の橋」は、昭和五四年ごろ青江三奈が歌った「青い日が揺れる盛岡の夜に君と出逢った中の橋」の切ないメロディーが有名となり、レコード販売三〇万枚のブームを呼んだ。

「上の橋」の欄干には、なんと、慶長の年号を刻んだ青銅の擬宝珠（ぎぼうし）が一八個も置かれていて、まさに盛岡の風雪を語る生き証人だ。橋のたもとの料理屋は数年前に壊されてしまったが、残された石灯籠にかつての華やかさが偲ばれた。